

St. Luke's International University Repository

長年看護教育に携わって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 聖路加看護学会 公開日: 2021-03-12 キーワード: 作成者: 渡部, 尚子, Watanabe, Hisako メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00014972

長年看護教育に携わって

渡部 尚子¹⁾

1. めまぐるしく看護教育に携わった35年間

3人の後輩たちの素晴らしい話を聞いて、私が20歳代、30～40歳代のときに、人生に対してこのような計画をもっていただろうか、あるいは看護に対して確固たる目標をもって歩んでいたのだろうか。そのようなことを振り返ってみると、今ここに立っていることが少し恥ずかしい思いがしている。小澤先生より、教育の立場から生涯における看護職業人としての発達というテーマで話すよう依頼を受けたが、私はその適任であるとはとも思えない。

私は、結婚・育児期のブランクを除いて35年間、看護教育に携わってきた。その間、自分の看護職業人としての人生をきちんと振り返り、また立ち止まって評価してこなかった気がする。それは、意識的にそうしたのではなく、35年間のなかで、たまたま5年から7年周期でいつも新しい仕事を任せられたり、与えられたりしたことによると思われる。

私は、聖路加看護大学の短大専攻科を修了しているが、助産課程を修了した最初の卒業生ということで、母校の母子・助産領域の助手として残ることになった。自分としては、この領域に、また教育に従事することは想像もしていなかったが、恩師の強い誘いに何となく心を動かされこの道に入った。そして今に至る35年間、看護教育に従事することになった。聖路加看護大学の次は滋賀県の県立短大、そして埼玉県の県立短大。いずれも開設時に就任したため、いつも開学当初のたいへんな時期にかかわってきたという思いがする。埼玉では、勤めて5年目に隣接の専門学校の統合再編。その仕事が一段落すると次は大学設立。そして開学と運営。やっと完成年次を迎えたところに併設する短大との統合再編。とにかく、この35年間は次々と新しい仕事が私の周りで起き、それを熟すことで精一杯であり、自分の仕事を真剣に評価したり、反省する暇がなかったというのが正直な気持ちである。

教育に従事したい、母性・助産領域の仕事をやりたいという強い希望や信念があってそれぞれの職場に勤めたのではなく、ぜひきてほしい、あなたでなければできないという要請や勧誘に、強い決意もないまま他力本願で主体性のない決め方で職場を決め、今日まで勤めてきた。

そんなわけで、本当にここに立って話をしようか逡巡した。私は、決してよい例ではないが、この35年間の自分を曝け出して話をしてみたい。

2. 職業人としての発達

誰でも同じだと思うが、職業人の自分を語る時、自分に影響を与えたさまざまな出来事、人との出会いを抜きにしては語れない。現在、私は65歳であるが、65年間に経験した出来事や人との出会いは、どれ一つとっても私の人生に意味のないものはなかった。特に、看護職に就いてからの40年間の経験は、私の教師としての深さと幅を創った。そこでは恩師をはじめ同僚、学生、また患者から多くを学び、そのような学びをあえて横糸と称するならば、その横糸を組織環境のなかで一ひもとつ織り上げてきた。なかでも、最初の勤務場所となった聖路加看護大学での経験と、20歳代半ば過ぎ、助産師として働いた2年間のドイツでの経験は、私の教師としての人格に強い影響を与え、それが私の土台となっている。聖路加看護大学では多くの先生方をロールモデルとし、先生方の看護観、それに基づく看護のあり様などを学ぶことができた。またドイツでは、看護の厳しさ、専門職としての仕事の厳しさを垣間見ることができた。往時の聖路加看護大学の厳しさは有名だったが、ドイツはその比ではなかった。指導は厳しく、学生は必死に教員やスタッフの指示に従うのだが、国家試験に合格するや否や、その日からスタッフとして全く対等に扱われるのには驚かされた。また、同僚同士のどのような喧嘩や感情のもつれにおいても、仕事場には私情や感情を持ち込まず、協力し合って働く、その切り替えのよさや割り切りのよさには感服するばかりであった。そうした多くの学びが、組織環境というなかでの経験であり、そのことが自分を成長させてきた。

しかし、自分の職業人としての発達が、職場環境で培われてきたかといわれるとむしろそうではなく、他の環境や要因によっても形成されてきた。結婚や育児、また看護以外の友人との親交、あるいはドイツで出会った友人や異文化。そうした家庭や地域・社会の環境も、看護職業人としての発達を助長した。したがって、組織環境の横糸は、看護や看護教育に関連して編み出される横糸だけでなく、家庭環境や地域・社会環境などの関係から

1) 埼玉県立大学

編み出される色の違った糸が混ざった横糸であったと考える。

3. 私が大切にしてきたこと

私は、この35年間、主体性なく与えられるまま自分の道を歩んできたが、それでも次の2つのことを大事にしてきた。

一つは、今を精一杯生きるということである。人はいつ死に遭遇するかわからない、私は、1940（昭和15）年満州で生まれ敗戦もそこで迎えた。3歳頃までの記憶は定かでない部分もあるが、敗戦から1946（昭和21）年の秋の引き揚げまでの1年余の体験が原体験となって、その後の自分の生き方を規制した。その体験とは、死を考える3つの事件である。終戦後、私の住むハルビン（満州北部の大都市）でも中国人による暴動や略奪が起き危険な状況となった。食物入手も困難となり、日本への引き揚げも見通しがたない状態となった。そのとき、父親はどこからか青酸カリを手に入れ、万一のときには隣近所全員でこれを飲んで死ぬのだと話した。女学生の姉は死にたくない泣き、5歳の私は、みんなが死ぬのであれば怖くないと素直に受け入れた。これが1つめの事件である。2つめは、ある事件に関連して、父親が私の目の前でピストルを突きつけられ、すんでのところ殺されそうになったことである。3つめの事件は、引き揚げ船のなかで、昨日まで隣にいた女の子が栄養失調で死亡し、日本海に水葬されたこと。この3つの死にまつわる出来事は、幼い私の脳裏に鮮明に焼き付けられ、人は死ぬのだ、いつ死ぬかわからないのだということを強く意識させるようになった。そのことは逆に、今を大事にする、今を大切に生きることを教えてくれた。私が、将来の計画や目標をきちんと立てなかったという背景には、この時の原体験が大きく関係していると思われる。

大切にしていることのもう一つは、差別や人権の問題である。終戦の情報が流れるや否や日本人と中国人との立場は瞬く間に逆転した。そのような混乱期にあっても、父親がそうであったように、父親の中国人秘書は、最後まで私たちに誠実に接したことや、従姉妹の同和出身の人との結婚、またドイツで、黄色人種であるというだけ

で差別を受けたことなど、そうした体験が差別や人権ということを強く意識させ、自分の生き方や教育に強く影響している。

4. 喪失・危機段階を迎えて

私は、エリクソンの人生段階でいえば、すでに成人後期の入り口に立っている。また、レビンソンの分け方でいえば、成人後期の移行期最後にいる。この時期の特徴は、喪失の段階から危機の段階、そして我執離脱の段階に移行するが、私はまさにその所に立っている。喪失の段階ということでは、私の頭も身体も確実に機能は低下し、若い頃の能力は少しずつ失われている。またこの4年間に、義父母・夫と愛する家族を3人失った。そうした喪失体験は悲しく苦しい体験だが、幼少時の死との対峙が、この危機段階を上手に乗り越えさせてくれたと自分を分析している。

また、失うということでは、35年間続けてきた看護教師としての仕事や、現在ある管理職の立場をどう上手に手放していくのか。そして自分の社会人としての、あるいは看護職業人としての多少の欲望や未練をどう抑えていくのか、今、そうした岐路に立っている。上手にソフトランディングできるかどうかかわからないが、看護学や心理学を学んだおかげで、自分自身を対象化しながら、自分がこの危機の時期にどう対応していくか興味をもって観察している。

5. 織物として受け継がれていくもの

私の看護職業人としての発達は、近い将来の退職をもって一応終わる。私の35年間の知恵や些細な経験値や技術値、そして人への公平さ、人への愛といった信仰値というものが、その時その時に創り出される横の糸となって、またそれを継続し累積によって創り出される縦の糸となって長い織物が創られてきた。その反物は不完全ではあるが、35年間に教えた数多くの教え子たちによって、より綺麗な、より人を感動させる織物となって受け継がれている。彼らの看護職業人としての成長をみながら、私の機織りの役割は終わりつつあることを感じている。